

春燈



9
月号

安住 敦の句

過ぎ易し牡丹とともに在りし日は

句集『午前午後』昭和四十四年

『午前午後』は春燈主宰を継承して初めての全句自選句集。敦の句に見られる、人の心をやわらかく包み込む独特の表現は、いよいよ磨きを加える。句集の後半突如現れる牡丹の句は八十句、句集の二割に及ぶ。絢爛さを競う反面、時に安易に流れる句も散見される中で、掲出の句は、敦の思いを受け止めてゆるぎもない。先生に頂いた句集に染筆された、この句の筆跡が今も懐かしい。

安立公彦

安住 敦の句

法起寺

一寺一塔 魯田これを圍繞せり

句集「柿の木坂雑唱」昭和五十年

斑鳩三塔と言われる法隆寺、法輪寺、法起寺の塔のなかで法起寺の塔に先生は最も心の安らぎを覚えられたのである。かつての大寺の面影は何も残っていないが、塔のみが天武十三年創建当時の端正な姿を保ち、今は周りを稲田に囲まれひっそりと建っている。変らないのは此の三重の塔と秋の日差しである。長く曳く塔の影と先生の何時までも去りがたく佇むお姿がひとつに溶け込

佐藤信子

西ヶ原日記 (三)

鈴木榮子

四万六千日浅草裏より詣りけり
朝顔の団十郎の見得なりけり
射的屋のをとりの子かな富士詣
麦藁蛇受けてそぞろに杳き日よ
ほほづきの大きく派手な母衣まとひ

撞^ヒ球^リ室^ド 緑の羅紗の梅雨湿り

車寄せは馬車寄せの沙羅双樹かな

泳ぎ来て亀看経す赤まぶた

洋庭コンドル和庭植^{うえ}治^じの青葉かな

鉦山王の迎賓館の夏館

サンルーム源平葛白がちに

足留めは仕事留なり台風裡

惜
春

細江久美子

ゆるやかに一步踏み出す試歩の春
癒えつつも振りむく病春暮るる
散策の道変へてみるリラの風
惜春の胸を離るる一句かな
梳る髪の毛直に清和かな
愛鳥週間雀にほぐすパンの耳
子と呼べる夕べの雀隠れかな
風ぐるま機嫌損ねてしまひけり
書淫の眼高みへ桐の花ひらく
短夜の枕に籠めし素馨かな

近江朱夏

中島節子

てんびんの里の五箇荘明易き
近江商法ここに始まる雲の峰
小幡でこ土の気残る武者人形
火伏せとて鮑の殻を葦葺に
夏雲や湖をへだてて比良比叡
さみだれの近江八幡碁盤割
八幡堀に大き陰おく山法師
梅雨ふかし見越しの松の蔵屋敷
鳩の子の神出鬼没璃々と鳴き
たそがれや時を惜しめと行々子

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

石楠花の磴下りたまへ観世音（室生）

桐の花芙美子旧居は坂がかり

信長忌米粒ほどの伽羅を炷き

七月十四日茶房と化しし地下牢も

セ・シ・ボンと越路は逝きし巴里祭

○ 陳 錫恭

時の日や一日一語のカレンダー

古代ヨガ呼吸法もて暑に抗す

進みぬる脳のおとろへ西瓜割

鉛筆で画く蜘蛛の巣や長電話

盛者必衰ウィンブルドンの夏の草

○ 増田 菖波

漁了へし漁父ステテコの船溜り

入道雲軍艦島を鷲掴み

浦沿ひの町営住宅西日燦

家抜ける涼しすぎたる浦の風

中学生夜な夜なペーロン稽古かな

○ 島田山流

空蟬の心身離脱の軽さかな

貴船川床瀬音も客も畏まり

流し目の黒出目金を購へり

青田波遊行柳の影揺らし

烏賊船の眠り貧る船溜り

春燈の句

鈴木 榮子選

読み返す父の詫び状梅雨さむし

福島 生方 義紹

ひと切つて括られにけり青芒

青梅雨や天金高雅美麗本

梔子の花に一ト声内積こと

梅雨晴の高原の水透きとほる

時の日やいつものやうに棹竹屋

パレットの彩のまじらふ青嵐

医書よりは文書に親し鷗外忌

荒梅雨や紅殻色の醬油蔵

神奈川 松波とよ子

虹消えてピエロは涙ふきにけり

鬱去らしめよ香水の二三滴

夏秋や潤れたるままの修験滝

炎帝や対峙の唐の三彩馬

みどりさす床塗り立ての能舞台

篝火や荒鶉の性を舟に見む

桐の花鬼面は口を閉ざしたる

鰻食べに明石大橋渡りけり

兵庫 福地 淳祐

篝火の爆ぜて仕丁は皆裸足

蜘蛛うまく風に乗り囀を張りにけり

降り出しの雨にかがやき濃紫陽花

梅雨晴や何処ともなく蝶の湧き

浦漁港船すべて沖鯖火見ゆ

蛸掛けの秘訣は教へてくれざりし

睡蓮のねむりに泡のまた一つ

小柴さんの楷の記念樹風薫る

東京 久本久美子

極楽はもとより知らず蓮の花

一掬の清水にいのち貰ひけり

三陸の梅雨寒未だ慣れぬ風

父亡くてつばの反りぐせパナマ帽

蟻の列金廢坑の柵くぐり

宮城 谷山 友夫

千葉 飯野 勝男

東京 佐藤 秀

千葉 一ノ瀬次郎



余言

鈴木 榮子

鉛筆で書く蜘蛛の巣や長電話

陳 錫恭

面白い句である。句ごろがあればこんなことでも句になるのだ。状況はよく分るし知的でモダンな句だ。蜘蛛の巣というグラフィックな視覚情報伝達が目に浮かんで、長電話の間に異次元めく線を引いている作者は、手先と電話のどちらに気持が入っているのだろうか。いろいろな句があつてよい。勿論一行詩でなく俳句で。

白の靴常のごとくに銀座人

山川 好美

白靴、白ハンドバッグ、白日傘、白ベルト、など女性は夏になると持ち物を替える。それが普通になつてしまつて白靴、白サンダルは更衣のころから気になる品々である。例えば作者は白靴を履くことは特になく、夏の外出にもサンダルの爪先あきの靴だつたとする。さて用があつて銀座へ出て来てみると銀座を闊歩する人は、白の靴を平常靴のごとく履いていることに気がついた。どうしてそれが詠むべき句になるかと

いうと、銀座人種の現代風俗を捉えていておもしろいのだ。

時の日や神の手にあるタイミング

後藤眞由美

時の日や、があるので大分句の鑑賞のレールは引かれている。そもそもタイミングは神の手にあるのか、自分で作るのか自分で作ったように見えても予定調和ですでにきまつているのか。そう思うとつまらないのでタイミングは自分で捻り出していると思うと、自分の勘や気が強くなり自然と身についてくる。人に迷惑をかけないことなので何かと反射的に感で仮決定してみると結構当るので、この頃は頭の体操のつもりでなんでも当たりをつけている。

葉桜に流水さやぐ川曲かな

青木 翠亭

川曲かわまがとは川の折れ曲つて流れる所。かわくま。天武紀(下)に川曲かわまがという文章が載っている。

川の曲りをそのような縛麗な言葉として使われたので眼についた。作者は書道の師範のお方ではなからうか。

葉桜と流水さやぐはごく普通であるのに―川曲かわまが―という言葉を使ったことによりこの句は形よく詠出された。

(以下略)